2016年12月23日

博士学位審査　論文審査報告書（課程内）

大学名　早稲田大学
研究科名　大学院人間科学研究科
申請者氏名　山崎　真之
学位の種類　博士（人間科学）
論文題目（和文）　「演出」される小笠原―新島民と呼ばれる移住者をめぐって
論文題目（英文）　Ogasawara that Performed : From the Cases of Migrates called New Islanders

公開審査会
実施年月日・時間　2016年11月28日・15:00-17:00
実施場所　早稲田大学　所沢キャンパス　100号館　第4会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	蔵持　不三也	博士（人間科学）	早稲田大学	文化人類学・民俗学
副査	早稲田大学・教授	森本　豊富	Ph. D.	UCLA	文化人類学・民俗学
副査	早稲田大学・教授	三浦　慎悟	理学博士	京都大学	環境動態解析

論文審査委員会は、山崎真之氏による博士学位論文「「演出」される小笠原―新島民と呼ばれる移住者をめぐって」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1　公開審査会における質疑応答の概要
申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1　英文タイトル中の“Migrates”について、”Settlers“という表記もありうるとの指摘がなされた。これに対し、後者の表記では「定住者」の意味が強くなり、本論文で主張する往還する「島民」のイメージとは多少とも乖離が生じる懸念があるとの返答があった。

1.2　同様に“Performed”の表記に対しても“Stage”ないし“Illustrated”といった表記も考えられるとの指摘に対し、再検討するとの回答があった。

1.3　本文中に写真が掲載されたアホウドリ猟について、かつて小笠原ではそれが輸出用ダウンに用いられていたとの紹介があった。また、ヤギがいつ頃島に生息するようになったかに関する指摘もあった。後者の指摘については航海者が戦前にヤギを島に招来したことは分かっているが、その具体的な年代や航海者については明確な資料が見当たらず、これからの調査に委ねたいとの回答があった。

1.4　また、小笠原の人口動態統計について、最新版を用いるようにとの指摘がなされた。

2　公開審査会で出された修正要求の概要

2.1　博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1　国内他地域の移住および入島・離島現象についての記述がほしい。

2.1.2　戦前の小笠原における学校教育に関する紹介もほしい。

2.2　修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

2.2.1　琉球弧の先行研究から、移住および入島・離島現象について記述をおこなった。

2.2.2　戦前の学校教育について、学校（尋常小学校）数や生徒数、教員数を調べ、記述した。

3　本論文の評価

3.1　本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文は申請者が小笠原諸島（父島・母島）で数年にわたって行ってきた文化人類学的フィールドワークの成果である。文化人類学の分野において、これまで同諸島での調査・研究はほとんどなされていないが、本研究では「小笠原イメージ」の歴史的変容と今日的受容、さらにそれに伴う人の移動を「観光」と「演出」という視点から考察している。そのための手続きとして、著者はまず序章で観光と移住に関する P. Cunningham の Social valuing（2006 年）や T. Edensor の Staging Tourism（2000 年）などの先行研究を検討し、本論文の重要な分析概念である前記の「観光」や「演出」、さらに「ゲスト＆ホスト関係」の定義化を試みている。第 1 章の調査地概況では小笠原の歴史や移住の実態を取り上げ、「はざまの島による演出」と題した第 2 章では、戦前のさまざまな博覧会における「演出された」小笠原、すなわち「内なる異国」としての小笠原イメージを、具体的な展示・陳列物の内容・数量・出品者などから分析している。第 3 章「新島民による新たな生業」では、ムニンヤキ（陶芸）やコーヒー栽培といった、「小笠原らしさ」を演出する新島民の生業とライフヒストリーが、当該新島民たちへのインタビューを通して論述されている。第 4 章「揺れ動くホストとゲスト」と第 5 章「往還する新島民」では、観光資源を「買う」ゲスト（観光客）と」「売る」ホスト（島民）の関係が固定的ではなく、ゲストがホストに転位したり、ホスト化したゲストが自らの小笠原イメージと現実のイメージとの乖離によって、再びゲストへと転位（離島）するメカニズムが、実例や統計データによって考察されている。そして終章では、前章までの論点をまとめながら、エコツーリズムに表徴される観光戦略としての小笠原イメージと、それを消費することで新島民化するゲスト、さらに新たな小笠原イメージを生産・再編集す

る新島民という演出的位相に目を向け、新島民の移動パターンを定住型（ゲスト→ホスト）、一過性型（ゲスト→ホスト→ゲスト）、定住乖離型（ゲスト→ホスト→〔3年の壁〕→ゲスト）、往還定住型（ゲスト→ホスト→ゲスト→ホスト）、定期往還型（ゲスト→ホスト→ゲスト→ホスト→ゲスト・・・）に分類する。そして、これらの移動パターンがにおいて、ゲストとホストがそれぞれの段階で小笠原イメージを演出することによって、「観光の島」としての小笠原社会が構築されてきたと結論付ける。

こうした著者の考察は悉皆的かつ丹念なフィールドワークに基づいて導き出されたものだけに説得力に富み、ツーリズムを島イメージの「演出」や「ゲスト＆ホスト」という視点から再検討する作業もまた、新島民の階差的な類型化ともども、斬新で明確かつ妥当なものといえる。

3.2　本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文が拠って立つ方法論は、文化人類学の「定番」であるフィールドワーク（年間行事の参与観察、インタビュー、石造物調査など）と関連文献渉猟である。著者はこれまで幾度となく小笠原を訪れ、新・旧島民と文化人類学者に求められる良好な人間関係を築いてきた。本論文にはそうした人間関係によってしか得られない、いわば内側のインフォメーション（深層化された情報）もふんだんに盛り込まれている。また、戦前の博覧会における小笠原の位置づけや新島民の生業への目配りも、本論文の内容に奥行きをもたせている。はたして旧島民が新島民にいかなる印象なり考えを抱いているのか、その論述は関係者への微妙な配慮ゆえか必ずしも明確になっているとはいいがたいが、相対的な分析はきわめて硬質なものといえる。

3.3　本論文の成果の明確性・妥当性：アメリカの文化人類学者クリフォード・ギアツが、調査対象社会の深層構造を抉り出す「厚い記述」という視点を唱えてすでに久しいが、本論文はとくに小笠原社会の特性を、そうした深層構造の一環をなす島民の可変的な人的構成や小笠原イメージの演出といった観点から析出している。単なる抽象論や観念論に走らず、あくまでも諸々の調査データに具体的に基づきながら考察を積み上げていったその成果は、当然のことながら明確かつ妥当なものと断じてよい。

3.4　本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。

3.4.1　本論文の独創性や新規性は、何よりも我が国における文化人類学的小笠原研究の「先駆け」だという点にある。これまで生態学や言語学などの分野ではかなりの研究蓄積があるにもかかわらず、なぜ文化人類学が小笠原を調査対象としてこなかったのか、その理由はなおも判然としないが、いわば「小笠原人類学」の基礎データとして、本論文が以後の研究に与えるインパクトは決して小さくはないだろう。

3.4.2　本論文のさらなる独創性としては、小笠原エコツーリズムを観光資本によるイメージ戦略によるとするような表層的な理解を超えて、新島民もまた異なる次元、とくに新たな生業を通して小笠原を「生産」かつ「消費」していることを解析した点にある。

3.4.3　もうひとつの特徴は、小笠原イメージをキーワードとして、「ゲスト＆ホスト」論から新島民の移動を分析したところにある。この可変的な関係性は、おそらく

これからの小笠原と読み解く上できわめて重要なパラダイムとなるだろう。

3.5　本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1　すでに述べておいたように、本論文は単なる観光論ではなく、フィールドワークや文献渉猟に依拠しつつ、新たな分析概念を導入して、小笠原社会の深層構造とエコツーリズムの裏側を緻密に析出したものである。その学術的・社会的意義は大きく、「小笠原学」の誕生を予見させると同時に、我が国の観光人類学にも大きな一石を投ずる業績といえるだろう。

3.5.2　さらに、「小笠原の生産と消費」にかかわる文化の生態系を、歴史的・文化的・社会的な側面から追究した本論文は、日系移民を中心に展開されている我が国の移住研究に対しても、ひとつのケース・スタディとして十全に貢献できるはずである。

3.5.3　本論文はまた、そのために書かれたものではないが、結果的にこれからの小笠原がいかにあるべきかを暗示するものとなっている。増大する一方の観光客をもろ手を挙げて歓迎する島民と、その風が比較的希薄な島民から構成される「断層化」された島社会とって、人々がいかにして「小笠原を生きるか」。そのヒントが本論文には含まれている。

3.6　本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。

3.6.1　観光（エコツーリズム）を起点として、小笠原社会の歴史的・今日的ありようを分析した本論文は、人と人、人と社会、人と生業といった現実的な関係のみならず、広く文化の生態系を構成するさまざまな要素を検討していく。この一連の作業は、広闊な知的眺望が求められる人間科学の研究にとって、じつに大きな方法論を提示するものといえる。その限りにおいて、本論文は人間科学の重要な試金石ともいえるだろう。

4　本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

《学術論文》

山崎真之：2013　新島民による新たな生業に関する研究―小笠原村父島の移住者の事例を中心に. 生活学論叢, 24巻, 15-26頁.

山崎真之：2016　揺れ動くホストとゲスト―エコツーリズムと小笠原新島民の生活実践をめぐって. 観光学評論, 4巻2号, 107-119頁.

《学会発表》

YAMAZAKI Masayuki：2014 New Subsistence and Cultural Construction by New Ogasawara (Bonin) islanders. IUAES2014 inter-congress: the future with/of anthropologies. Conference Program, 198-199.

山崎真之：2015　小笠原新島民らがもたらす文化変容―父島・母島の新たな生業の事例を中心に. 日本文化人類学会第50回研究大会発表要旨集, 129項.

YAMAZAKI　Masayuki：2015　Cultural Anthropology Study of New Settlers Living and Images

in “Islands of Ecotourism”：Cases from Ogasawara/Bonin islands, Japan. 114th American Anthropological Association “Familiar Strange”. Program, 220.

5　結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以　上